人生は、人間性を磨く修行道場

過ちて改めざる是を過ちという（あやまちてあらためざる、これをあやまちという）

これは『論語』の有名な一節です。解説するまでもありませんが、「**過ちを犯したことを知っていながらも改めようとしない、これを本当の過ちという**」という意味です。

この時ほど、この言葉が胸に刺さったことは無いかもしれません。（5月25日執筆）

皆様ご存じだと思いますが、5月6日のアメリカンフットボールの定期戦で、日大（日本大学）のディフェンスライン（DL）宮川泰介（たいすけ）選手の悪質タックルによる関学大（関西学院大学）のクオーターバック（QB）を負傷させた問題で、日大の内田正人（うちだまさと）前監督と、井上奨（いのうえつとむ）コーチによる反則指示の有無が注目され、社会問題となりました。

宮川選手（日大）は、パスを投じた無防備な関学大QBの選手に、背後から激しくタックルをしたという件です。

この悪質な反則行為で、関学大の選手を負傷させた日大の宮川選手が二十二日、東京都内で会見を開きました。宮川選手は丸刈りで、黒ネクタイを締めて会見に臨みました。

問題発覚後、日大からの謝罪や、初動の対応が後手後手に回っている最中に、宮川選手が独断で謝罪会見を開きました。その誠心誠意からなる謝罪の姿勢を拝見した私は、色々な感情を抱き心打たれました。

会見は宮川選手の要望で行われ、「**顔を出さない謝罪はない**」という理由で、学生という立場で異例の顔出しを決意したというのですから実に潔い。

当欄では、社会問題となった反則行為をはじめ、その後の日本大学や監督やコーチの対応、一方の当該選手（宮川選手）の対応を俯瞰して見つめながら考察したいと思います。ただし一つ断っておきたいのは、これはあくまで私の持論であり、ましてや素人で外野の私が滅多なことを言うものじゃないことも重々承知の上です。日大アメリカンフットボール部を過剰に責め続ける意図は御座いませんし、当事者以外の人間が、いつまでも過剰に反応し続ける事にも問題がある事も承知の上で、敢えてこの問題に触れさせて頂きたいと思っています。

●スポーツマンらしい勇気と全力の謝罪

さて、宮川選手の会見ですが、**日本記者クラブ**に集まった報道陣は実に358人。この数は現在アメリカで大活躍している大谷翔平選手がメジャーリーク挑戦会見を開いた時の255人を大幅に上回る人数です。しかも今回の件は、学生スポーツの中で起きた事案。おまけに大きな大会ではなく、定期戦での出来事でした。そして、二十歳の学生に無数のフラッシュが浴びせられるという酷な状況に、名前と顔を明かして、この問題と真摯に向き合って会見に臨み、答えられる全ての事を話した宮川選手の態度には、見る者の共感を呼んだことでしょう。私も、今回の1時間を超える、宮川選手の謝罪会見を全て拝見しました。

非を正直に認めるのは**クライシス・コミュニケーション（危機管理広報）**の基本ですが、二十歳の宮川選手は、果敢にそれを完遂しました。世間から批判を受けたとしても、所属する大学や部を敵に回したとしても、「**事実を明らかにした上で、自分が悪かった点を謝りたい**」というスタンスを貫いたのです。

まだ学生である息子が謝罪会見の場にさらされる、両親にとっては大きな決断だったことが推察されますが、よくぞ、ご子息の背中を押して下さったと頭が下がる思いです。

会見で宮川選手は「選手として復帰は考えていない」と言い切る潔さも見せました。「勇気を出さなければいけない」・「全力で謝りたい」というストレートな思いが、会見を見た人々の心を打ちました。相手の選手には気の毒ではあるものの、宮川選手がこのような心境になられたことで、「教育の一環としての学生スポーツ」という存在意義は、ギリギリのところで守られたのではないかと思っています。

今回の会見で宮川選手は、「これ以上話す事がない」と言っていいほど、詳細にわたる経緯を語られました。また宮川選手が語ろうとしていたのは**謝罪と事実**であり、監督やコーチの**問題点には一切触れませんでした**。これは本当に簡単にできることではありませんが、宮川選手は、好青年と言うに値する立派な姿勢だったと思います。

●学校における学生の立場

ところでです。**本来守られるべき存在である学生が、矢面に立たなければいけないという点に、どうしても違和感を感じてしまいます。**監督、コーチの指示がどうであれ、実行した選手が悪いのは事実ですが、**彼はあくまで学生です。学生スポーツで行った出来事で、それに対して公の場に1人で出て行く必要があったのでしょうか。**サポートする大学職員、部長先生は、なぜ同席していないのでしょうか。根本的に大学スポーツのあり方が問われるものだと思います。おまけに会見場が日本記者クラブでした。大学には広報部も学生部もあるでしょうし、体育局（体育会を統括する組織）もあるでしょう。これだけ大きな社会問題になりながら、大学側がきちんと会見を設定して、なんらかの部署が正式にやるべきではないでしょうか。記者会見場が日大校舎ではなかった事も異様と言う他ありません。学生生徒にとって、学校とは一体何なのでしょうか？先生とは？監督やコーチとは？

本来、学生スポーツは、学生が自立するためのサポートを監督やコーチなどのスタッフがやるべきものだと思います。それを指導者が全面に出て支配するという構図は、やはり異常です。日大側が出したコメントを聞くにつれ、**学生の問題を他人事のように受け止めているようで**

したし、いったい誰を守ろうとしているのか?本末転倒とはこの事です。

今回の騒動で、監督やコーチ、引いては学校に、体質的な問題があることが明らかになりました。会見での宮川選手の姿を見て、日大や、内田前監督と井上コーチは、何を感じ、どんなリアクションを示してくれるのか見守っていましたが・・・なんとも残念な表明となりました。

内田前監督は「すべて私の責任です。」と言いつつも、「指示はしていません。意図的な乱暴行為を教えることはなく、指導者の指導と、選手との受け取り方に乖離（かいり）がありました」と。つまり、「宮川選手が単独で反則プレーをしました。そういう選手を育ててしまったのは、全て私の責任です」と、言い放ったのです。本当にゾッとするほど恐ろしいまでの保身と、責任転嫁の姿勢を見せた内田前監督でしたが、この発言と態度が被害者家族の怒りの火に油を注ぐことになり、結果的に刑事告訴される方向へ進んでしまいました。

今回の件が明るみになり、日大アメフット部は、**春の公式戦は全て中止となり、自主練習しかできない状況**となりました。この事実を聞いた現役の日大アメフット部員達は、一般の私達以上に、監督やコーチの会見は衝撃的でした。取材に応じた現役部員は「監督にも大学にも失望した」と唇を噛み締めていたのが印象的でした。**大学として、大人として、誠意ある対応をしてもらいたい**と、心の底から願わずにはおれません。

●学生スポーツの意義って何?

学生の本分は勉強です。それは日本国内、ひいては世界中の常識であると思います。学校とは学ぶことを目的とした場所であり、そこでスポーツに力を注ぐということはどのような意味があるのでしょうか。私は『**人間性を育む**』という一点において、その意義があると思います。

体育会として活動する上で、とりわけ「**競技的成長**」と「**人間的成長**」の２つの成長が目的として挙げられるでしょう。競技を通じて得られる「**人間的成長**」が体育会で活動する意義であり、ただ強いだけでは意味を成さないとも言えるかもしれません。

つまり、「**一人前の人間（大人）になる**」ということを目的として活動しているとも言えましょう。例えばアメフットの場合は、グラウンドで死力を尽くし練習して「技術的成長」があったとしても、日頃の行いが悪ければ、一人前の人間と言うには程遠く、その程度の人間という事になります。日頃の行いを徹底するのはなぜか。それは学生スポーツをしているからと言えます。常日頃の行動から高いレベルを徹底することが、「人間的成長」に繋がるし、引いては勝つために必要となる要素も影響してくるものだと思います。

体育会として活動する上で、その根底となる行動規範が無ければただの烏合の衆（規律も統一も無く寄り集まった群衆）です。**どんな人間に成るのか?**ルールの中で努力精進する事が、学生一人一人の人間力を磨く事になり、そこに学生スポーツの意義や素晴らしさがあるのではないかと思います。

●スポーツの祭典オリンピック

最後になりますが、世界最高峰スポーツの祭典オリンピックの意義はどこにあるのでしょうか?

『**オリンピック憲章**』に掲げられている意義には次のような文々が光ります。

★スポーツを人類に役立て、それにより平和を維持するため

★スポーツ選手を、政治的あるいは商業的に悪用することに断固反対する

『**オリンピック憲章**』に掲げられている十六項目のうち、ここに２項目を抜粋して紹介しましたが、日大アメフット部の姿勢は、この２項目から外れてしまいました。

ところで、**オリンピックの本当の目的をご存知ですか?**それは、「**私達は、１つであることに気づくため**」だそうです。

「**肌の色、言葉の違いはあっても、私達は１つなのですよ**」**ということを、スポーツを通して気づいてほしいという願いが込められている**そうです。

考えてみると、自分と相手では別々の存在に思えても、相手がいるからこそ試合ができるのだという事実があります。相手がいてこそ、試合が可能です。人間１人では、試合は成り立ちません。つまり、自分と相手は１つです。また、応援する人々も同じです。自分と、相手と、応援する人々も皆が１つです。「皆の心が１つになった瞬間、全てが１つになります」。だから歓喜できるのかもしれません。

ちなみに仏教的視点で言えば、１つになるのではなく、最初から、そもそも１つなのです。

スポーツを行って、あるいは観戦して、熱い汗を流し、感動の涙が流れるのは、全体が１つだと気づいた瞬間なのかもしれません。「私達は全て１つ」ということに気づく切っ掛けになれば、オリンピックは大成功と言えそうです。問題は何事も「行き過ぎ」です。本来あるべき姿や理念を振り返ることは、あらゆる組織、あらゆる活動において必要だと言えます。

『**過ちて改めざる、是を過ちという**』

冒頭に紹介したこの言葉を、日大関係者の皆様を反面教師にして、私達自身も拳拳服膺（けんけんふくよう）して忘れないようにしたいものです。

合掌　副住職　谷川寛敬